

『論争』特集 人づくり論の新方向 一九六三年二月（論争社）

人づくり論と教師の役割

矢口 新
(国立教育研究所教育内容室長)

一

人づくりとは何を問題にすることなのだろうか。よくわからないところもあるが、ごく一般的に解釈すれば教育という言葉をもっておきかえることが出来るのであろう。池田首相が人づくりに力を入れるというのは、教育の問題に力を入れるということと大してちがわないと見てよいであろう。それではなぜ人づくりとって、教育といわないのか、そこには理由もあると考えられる。やはり人間が問題になっているということであろう。ただ教育事業というのでなく、本当に必要な人間、これからの社会に必要な人間が意識にのぼっているのである。そういう意味では人間を考え直すという根本的な態度がそこにあると思われる。人づくり論に対しては、だから、まず人間像がはっきりしなくてはならぬなどということがいわれるのである。人づくりを根本的に考えるとなると、確かにそういう基礎的なところから出発しなければならぬことはいうまでもない。従来の惰性の上でどこかに手を入れるというようなことでは、人づくりという打出し方をしたことの意味がないことになる。

とって、人間像とは何ぞやとか、これからの社会に働く人間像はどのようなものかというような観念的論議を重ねていたのでは、また

日が暮れてしまふであろう。そういう観念的論議もまたある意味では従来の教育の考え方の惰性であつて、頭の中であれこれと、デッチあげるが、実際には少しも適用しないこと、実現されないことが多いのである。現在実際にやっている教育といわれるものの姿は、ただ習慣的な行動であつて、頭で考えた事と似ても似つかぬものが多い。そういう状態のところ、人間像論議をやつても一向らちがあかないであろう。

だから人づくりは根本的に考え直すという方向を示しているが、それは根本的に考え直すということは何かということから出発するということであろう。一体根本的に考え直すといっても、われわれの目につるものは、現に行なっている教育の姿であり、そこからつくられて来る人間の姿である。われわれの思考もそこから出発する以外にないのであるが、その現にあるものが、何であり、いかなる体系にとづいてつくられたものかについては人々によつてさまざまな見方のちがいがあふ。人々は勝手におのれの見るところ、或は解釈によつて、勝手なことを言うことが出来るのであるが、それでは百の人づくり論が出て、果してどれが正しいかがよくわからないことになる。そこに科学的な力の見方が必要になつて来るので、科学もまた十分に信頼出来ないということもあるけれども、しかし、われわれが現に何

をよりどころにするかといえ、それ以外にはないというべきであろう。科学を基礎にしてのみ、正しい人づくりの方向が打ち出せるのであって、それで人々も納得してじっくりかまえて、努力をすると思われ。その点では、たとえば、イギリスのクラウザー報告のごとく、数年を費してさまざまなデータを分析して、科学的に国の政策を打ち出すという態度が最も大切である。今の日本では、それではもう間に合わないという人がいるかも知れないが、そんなら何故もっと早くそれをしなかったか。結局われわれの見通しが甘くて、目先のことだけしか考えなかったからであろう。或は今までまだその時期に到達しなかったといってもよいかも知れない。といって、今諸外国でやろうとしている方策をわれわれも早速まねをしようというのでは、またまた人まねになってしまふ。間に合わせになってしまふ。おそくてもよい、本物をやってみてほしい。今の日本では、人づくりの内容をどうのこうのというより、本物をつくりあげるには、本物の基礎的な積みあげの努力が必要だということが、一番大切な観点ではないだろうか。この意味で最も基本的な問題から検討してほしいと思う。人づくりを論ずるに当って特に大切だと思われる点である。

科学的に、現在の教育の実態を究明して、何が問題かを明らかにするということは、なかなか一朝一夕に出来ることではないが、今までの究明を集大成して行くことなどが第一に、やるべきことである。それには、それをやるにふさわしい機関もなくてはならぬのであって、現在やるべきことは、そういうことであろう。ただ有名人が集って思いつきの意見をのべて、それで新しい政策が生れるものではないといふべきである。

二

人づくりについては、さまざまな方面から検討を加えなくてはならぬのであって、その点では現在人々が考えているほど容易なものではない。まず人づくりというときに、誰の頭の中にも、人をつくるということについては、ある具体的な姿が浮んでいよう。つまり、人をつくるには何をすることなのか。その教育の方式、実際に教育者が教育をする活動の仕方といったものについて、必ずしも自覚的ではないにしてもある直観的なものが浮んでいよう。それは、その人自身これまでに教育されて来て、また現に行なわれている教育の姿を見て、そこからおのずからつくられたものであろう。そういうものが見れば、数学の公理のようなものとなって、それを前提として人づくり論議をするのである。いかなる人間をつくるのかを考えなければならぬ、というようなことをいうときでも、その人間をつくる実際の活動というようなことについては、無意識のうちに前提となっている教育活動のあり方というものがある。人づくりには、すぐれた教師が必要であるなどというときにも、その教師は実際にどのようなことをするのかという点については、細かいことはともかく、大体においては、今の教育活動の仕方が暗々の裡に前提となっている。ところがそういう前提もまた問題にされなければならぬということである。否、むしろその前提を問題にするのが人づくりという問題が出て来た所以ではないだろうか。

例えば、日本人の道徳性というようなことも、おそらく人づくりでは問題になるであろう。そうして、公衆道徳、社会的行動の態度が極めて劣等であるなどと論ぜられるかも知れない。そうした場合、そういう教育が必要だとみんながいうとき、そういう教育の実態をみんな

がどう考えるかということである。日本人の中には、かつての修身教育の記憶もあって、それが必ずしも効果をあげなかったわけではないから、そういうことを頭において、道徳性を高める教育をしなくてはならぬというようなことがいわれるかも知れない。しかし、そこに問題があるともいえるのである。それは根本的には科学的に究明する必要があることであるけれども、日本人が現在もっている社会的行動の態度の劣等なのは、他ならぬ、過去の教育の結果なのであって、過去において行なわれた道徳教育の方式を打ちやぶらなければ、新しい社会における道徳は形成されないのではないかとというように考えられる。

そういうように考えると、問題は簡単に行かない。ただ道徳教育に力を入れるなどという方針がうち出されただけでは、あまり意味がない。結局はみんながこれまでの惰性の上にならざるを得ない教育をするというだけになる恐れは大いにある。ヨーロッパでは家庭におけるしつけはきびしく、とくに社会的行動については日本人などとは比べものにならぬ教育を行なっている。大人みずから身につけたマナーを子供にも強く要求している。幼年の頃からそうして育てられるということが、彼等に社会的な行動について、一定のセンスが出来るものではないが、しかし問題は、単に昔流の修身教育方式でかたづけかなることだけでは確かである。家庭教育の問題にも、社会教育の問題にもなるし、生活改造の運動にもなるであろう。そういう根本的検討をしてもらわなくては、人づくりなどという特別な言葉を使って問題を提起した意味がなくなってしまう。もしうわつらのことでお茶をにごすなら、官僚にまかせておけば、従来の延長線上にいろいろなことをやってくれるであろう。

このようなことは何も道徳教育だけの問題ではない。日本の教育は現在あらゆる面でこのような根本問題に当面しているのである。今われわれがやっていることを根本的に反省して、新しいものを建設しなければならぬときに来ているのである。しかしただ新しいことを思いつきでやるというのではない。あくまで歴史の歩みの中で、一歩をつみあげるのである。しかしつみあげるといっても、ただ従来の延長の上につみあげるのではない。現実から出発して、現実をつくりかえるのである。その意味で、現実の構造改革への出発点としての人づくりが望まれるのである。

三

私が問題にしたいのは、以上のような意味での人づくり論の前提として存在していると思われる日本人の教育方法観の問題である。実際に教師が活動しているその姿から、教育とは何をするのかということとを、教師も父兄も一般人もおのずから頭に描いているものである。そういうものが案外教育についての考え方をあやまらしているかも知れない。つまりそういう教育方法観なり教育観が誤っているときそれを前提として考えるなら教育方針についてもまっとうなものが出て来ないのではないか。そのところを問題にしてみたいのである。われわれが、教育という言葉で頭に描く具体像は、教室で教師が、学級の生徒を相手にしているあの姿であろう。その他の場合ももちろん頭に思い浮かべられるが、その原型となっているのは常にあの教室での教師の活動の様で、あそこに教育の活動があり、教育を受けるといえば、あの教室の生徒の姿であろう。その教育はわれわれにとつて当り前すぎることであるが、ここには根本的な問題がある。それは現在のこの授業の姿は、学級一斉授業であって、人づくり、或は教育の本

質から考えてみると、大変な問題をもっているということである。

話をわかりやすくするために、例えばイギリスの教室の例を示そう。比較してみるとよいであろう。イギリスでは、一学級五十人なんという教室は存在しない。三十人位であるがその授業をみていても、一時間のうち教師が教壇に立って、日本の教師のような態度で生徒に対するさまはほとんどない。つまり教師は生徒の一人一人をつぎつぎと見まわって、勉強させるための課題を与え、教材を示し、それが出来たかどうかを診断し、また次の課題を、というようにやっている。教師は生徒の間をぐるぐる廻ってあるいて活動している。こういう教室の姿からみると、日本の教師は、ほとんど一時間中、教壇の上立ってスターのごとくやっている。これも大へんな活動であるが、その質はまるでちがうわけである。他は大衆を相手にし、他は一人一人との人間的接触をしている。

私はよく学校の研究発表会などで、授業を見るが、多くの参観者が何を見に来ているかというところ、そういう教師の活動振りを見ているのである。教室のうしろから入って、生徒の席の後のあいたところに立って、教師の独演ぶりをみているのである。生徒の後ろに立っているから生徒の頭しか見えない。もっぱら教師をみている。ここに日本の教育での教師のもっている意味があらわれており、生徒の活動の意味がはつきりあらわれている。つまり教育とは、教師が一生懸命独演することなのである。生徒は何をしているかは、あまり問題にならない。外国で授業を参観すると、よくぶつかるとは、教師が一人の生徒の横にすわりこんでいろいろと指導している。他の生徒はそれぞれ自分のことをやっている。それでいて教室の統一はとれている。このような姿の中には、日本人のもっている教育方法とはちがったものがあるようである。教育するというの一人一人が育つようにしてやることで、

それには一人一人にふれなくてはならぬという考え方である。日本人の教育観はそうではない。小学校から大学まで、五十把一からげである。文科系の大学などはひどいものである。数百人が講堂に入って、教授は講演をしている。日本の大学は、教授が学生の世話をしないというところで世界的に有名であるが、教育について、一斉授業の考え方、教師独演会的考え方で人づくりが出来る、という固い信念があるようである。

こういう考え方ではすしづめの解消などということが成立つはずがない。教師の活動は五十人一からげを相手にしてやることだから、五十人でも、四十人でもそれ程大きなちがいはないのである。また試験の答案をみるとときには十枚よけいに見なくてはならぬ。或は、いろいろと金を集めたりする雑務の時には少し労力がある。そういうことである。それも教師のエネルギーを消耗させるものになるから、ひいては教育の能率に関係する。そこで教師の負担を軽減するために学級人員をへらせなどという日教組的論が出て来る。これでは誰が考えても弱い。しかし実際には、そういう意見が一般である。そうではなくて、五十人では、授業の際に一人一人をみてやるという教育が行えないのである。五十人では教育にならないのだ。そこを誰もがはつきり自覚しなくてはならぬ。しかしそれには、それにふさわしい教師の教育活動が行なわれなくてはならぬ。その点が教師自体にもはつきりしていない。

そういう考え方を根底において考える教育がとかく観念的になり、観念注入主義になるのも当然であろう。自然科学の教育では、早くから観念的には、実験、観察の重要さが説かれているが、実際には実験や観察は真先に切りすてられる。時間が足りないなどという場合に結局、教科書をよむか、説明をして終りにしてしまふ。それで教育にな

るといふ信念(？)はとても強いのである。それは教育にならぬといつても、根本の考え方がちがうから言うことを聞かないのである。

四

何事でもやって見なくてはわからないなどということがいわれるが、全く自分でやらなくてはわからないのである。わかるという言葉がわかるということではないからである。このことをラーニング・バイ・ドゥーイングなどと教育の世界では言っている。これは戦後の新教育と共に入って来たけれども、結局日本の教育の土壌では育たなかった。経験主義の教育などといわれて、ある種の授業の形態が生れたが、結局ものにならなかった。一人一人に必要なことをちゃんとやらせるというような考え方に転じて、教師独演会の変形にしなければならなかった。例えば五十人の子供に、ゆうびんごっこをやらせるというような授業がはあったが、それは五十人の子供をそれぞれ手わけして、ある者は郵便集配人、ある者は局員、ある者は利用者というようにわけて、みんなでごっこ遊びをするのである。これは一斉授業の変形であって、教師がいかに五十人を手足のごとく動かすかの見せ場であった。一人一人の子供が何をしているかをみると、一人一人はただかばんをぶらさげて教室の中を行ったり来たりしていたり、スタンプを押していたりするというのである。何をやっているか、そのやっていることと、教師がその子供に何を教えて、何が出来るようにしてやろうと考えているのかということとは少しも一致していないのである。

ゆうびんの社会的制度をわからせようとするなら、その社会制度をみて、それを意味づけること、解釈することを生徒一人一人がやらなくてはだめである。一人一人がそういうように大脳細胞を働かせなく

ては、頭を訓練していることにならない。教師独演授業には、そういう考え方はないのである。つまり自分でやってみなくてはわからないという昔からいわれたことさえ、はつきりと考えられてはいないのが日本の教育である。それは学生、生徒の数が多すぎるからだという人もあろうが、しかし実際には最近農村で三十人位の学級が出て来ても、教育の仕方はかわっていないのである。教育ということになると、途端に、大衆への講演方式が考えられるのであろう。私はこの習慣的な考え方が問題だと思う。

一体話を聞いてわかるというが、それはどういうことか。話を聞いたからわかるのでない。話を聞きながら自分の大脳細胞が働いているからわかるのであろう。いわば、話し手が頭に浮ぶことを声に出して、それが耳の鼓膜にひびいて、それが大脳細胞を刺戟して、聞き手が話し手とおなじように細胞を働かせながらわかるのであろう。その意味では、聞いているというのは、やっていることなのである。だから話し手の言うことの中に、聞き手の経験、やったおぼえないことが出て来ればわからないということになるのである。やはりやらなくてはわからないのである。

こう考えると、教育で大切なのは、いかにして、生徒にやらせるかということである。やらせると、一人一人のやる能力がちがうから、そこで一人一人が問題になるのである。話を聞かせるという考え方だと、話す方のペースでしか授業は考えられないが、やるということをもとにして考えると、話を聞いている生徒の能力はそれぞれちがうから、途中で脱落してしまうのも出るわけである。

しかし一斉授業ではそういうことを見ないから、教育は教師のペースで進められる。わからない生徒がいてもそれは問題にされない。それは頭がわるいのだというように解釈される。なるほど能力が低いと

いうこともあるがそれでもゆっくり時間をかけてやれば、やれるようになる。わからないのは、自分でやってみることをしなかったからである。教師の話のテンポが早すぎて、頭のよい生徒ほどについて行けなかったからである。ゆっくりやればわかるのである。しかしそういう見方はしないから、頭がわるいで切り捨てられてしまう。これが今の教育ではないか。

五

こういう教育観の結果、現在行なわれている教育は、事実として何をしていることになるのだろうか。一つは、やらせるといふ考え方がないから、観念注入主義になって、コップの中へ言葉という水を注ぎこんで記憶させる仕事に力を入れることになってしまっている。それは端的に現代の学生、生徒の姿にあらわれている。学生、生徒は、教師の話の話を聞いていることが生活時間の中で圧倒的に多い。そして後は試験、テストである。試験は年に何回かに分けて行なわれるが、どこからどこまでというように言われるから、そこを一生懸命暗記して行く。そして試験が終わったら、半分以上忘れてしまう。そして最後に試験の成績が残ってくる。試験は暗記力の調査であると言っても間違いではない。教育課程とかカリキュラムとか言って、教育の内容の系統が考えられているが、実際に生徒がやっていることは、それを二カ月分か三カ月分ぐらいのこま切れにして、暗記をして、そして試験を受けてあとは忘れてしまうのである。教育課程を生徒が歩むことによつて頭の訓練をされて、一人一人がのびて行くようにはなっていない。ここに、今の教育方法の錯覚があるのではないか。

その証拠に次のようなことを考えてみるとよい。中学校や高等学校の教師が、自分の専門の教科を除いて他の教科を生徒と一緒にになって

試験をうけたら何点をとれるであろうか。恐らく三十点位であろう。このことは、今の教育に対していろいろな問題を提出する。その専門以外の教科には三十点しかとれない教師が、十人よつてたかつて一人の生徒に対しては、みな百点をとることを要求している。矛盾ではないか。生徒の方は苦情をいわずに百点を目標としてやっているが、そういう努力がまがりなりにも出来るのは、実はこま切れとなった暗記の試験だから、まあ三、四十頁のことなら目をつぶって暗記しようというのでやっているのである。どの教科にしても、本当に百点をとるようにその教科のことが出来る人間かどうかというテストになったら、どこにもそういう教科の本質的な考え方の出来る生徒は育ってはいないのである。そういうことでは大学を卒業したといつても、何かが出来る人間にはならない。何かをすることが出来るようになるには改めて勉強のし直しということになる。人づくりとしてはまるで能率のわるいことをやっていることになる。

しかしそれにもかかわらず、みんな学校へ学校へとあこがれるのは、それが職業の門のパスポートを与えてくれるからである。つまり社会全体がその人間が何が出来たかを問題にして人を採用するのでなく、学校という場所を通りこして来たかどうかだけを問題にしているのである。社会一般に、学校は教育をしてくれる場所だという信頼があるのである。しかしそのやっている教育というのが右にいったようなことなのである。しかし人々はそれに気づいていない。それが教育だと思っている。

もう一つこの教育観が生み出す悪い結果がある。教師は一人一人についてよく何が出来るか、出来ないかを調べて、一人一人をのびさせてやるという考え方がないから——少なくとも頭ではそう考えていても、実際やっていることはそういうことでないから——結局生徒とい

う集団を前にして独演をやって、その結果を試験して点をつけるだけである。前にいったように、自分を標準にして百点をとることを要求し、出来る生徒、出来るよくない生徒、頭の悪い生徒というように評価を下すだけである。本当に出来るようにしてやるのでなく、記憶をみるのが主になっているが、ともかく生徒を採点しているだけである。いわば選択しているのである。自分のしゃべったことをよくおぼえているかという観点から、よくおぼえている生徒とそうでない生徒を選別しているのである。しかしそれはよい子、わるい子といった人間全般の評価にうつりやすい。こうして極めて一面的な見方からやっていると人間全体の評価のようになつて、生徒をそのように扱う。生徒はそういう取扱ひの中で、大部分は劣等感にさいなまれないわけには行かない。教師が一人一人を見て、お前はこうしてやれ、これが出て来るようになったらこれをやれというようこまかく指導してやるわけではなく、従つて生徒は育てられているという実感はもつまい。ただ教師の独演会を見せられて、そのあとは試験であり、採点であり、点が変われば、叱られるか、恥をかくのである。多くの生徒は自分が劣等であることに自信をもつことはあつても、何が出来るから、これを以て世の中のためにつくそうなどという考え方には絶対になるまい。そうなると、点をとることだけが目標になる。そのために歯をくいしばつて努力をする人間もいるけれども、また卑劣な手段を弄するものもいるわけである。人をけとばしてもよい点だけはとろうというようなことになる。誤つた競争意識の中へおいこまれるのも、こういう試験、採点といったことが原因である。

結局人を育てるといふことは、こうして消えてなくなつてい

六

こういう教育ならざる教育の中に生活している間に、われわれの感覚が麻痺して行く。何を考えても、まっとうな教育を行なうということから遠ざかつて行く。教師の養成をどうするかを考えても、教師の活動の仕方についてのまっとうな考え方が立っていないところに、本当の教師養成の目標が立つ筈がない。教材、教具、施設設備を考えても、もつぱら教師独演の教育を中心にして考えれば、本当に人間を育てる施設設備になる筈がない。学校体系を考えるにしても、いかなる人間をいかに教育するかについてのそもそもの考え方にあやまりがあれば本物にはならない。例えば後期中等教育の問題についても、一人一人をそれに応じて育てるというたてまえならば、さまざまな形態、さまざまな性格の学校をつくつて教育することを考える筈であるのに、そうは考えないで、選別して入学させる、させないということばかりを問題にする。それは結局教師独演について行ける生徒だけを入学させるという考え方なのである。能力のあるものを入学させるといふのは、もつともらしい考え方であるが、本当はごまかしである。どんな人間でも、仕事に関し、また社会生活に関し、それぞれ正しい考え方、行動の仕方が出来るように育ててやることは出来る筈である。育ててやるうという考え方が中心になるならば、様々な育て方がある筈である。教育を受けようとする者を、排除するのは、一つの特権意識でしかない。

この特権意識は、父兄の利己主義と結びつく。自分の子供だけは学校へ入れて、人より有利なパスポートを得ようとする。自分の子供が何が出来るかを問題にするのでなく、人より有利な学校を出さえずればよいのである。こうして入学試験準備に狂奔する。少しでも他人よ

り有利なものがあればそれを使って、学校へ入れようとする。金を使って家庭教師をやとい、塾へ通わせ、裏口入学をする。しかしそれらのことは、子供に真に、能力をつけることを考えているのではない。何でもよい、人より有利でありさえすればよいのである。子供に社会人としての正しい生活をさせるということなどはすっかり忘れられている。こうして、親さえもが、人づくりとは無関係なことに狂奔する結果になる。これでは救いがないのである。これが、教育観、教育方法観のちよつとしたくいるいもとなつていとすれば、恐ろしいことである。ここまで来てしまったものを一朝一夕には直すことが出来ないかも知れないが、しかし、改めるべきものは改めなければならぬ。まず教育の姿を正す。これが案外大切な出発点ではないだろうか。

教育とは、一人一人の能力をのばしてやることだ。われわれの能力がのびるのは、自ら何事かをなして、やってみてのびるのである。だから、能力をのばそうとすれば、生徒にやらせなくてはならぬ。一人一人にやらせることである。いろいろやる中で、得意なものもあるし、不得意のものもある。得意のものは伸ばし、得意でないものは、のびなくても仕方がない。それでよいのであろう。誰も長所あり、短所あり、である。長所によって、人を助け、短所は人によって助けられる。相補い相助け合つて社会生活は成り立つのである。このような考え方になるなら、第一に教師は一人をよくみて、一人一人に必ずなすべきことをなすような教育をしなくてはならぬ。ラーニング・バイ・ドゥーイングという言葉を使つていうなら、そのドゥーイングをさせることである。そのドゥーイングのプログラムを考えることがこれから最も大切なことであらう。

今までは、生徒のドゥーイングでなくして、教師がなにをなすかばかりが考えられた。これからは生徒が、いかに考えるか、何をするの

か、そのためにどのような教材を与えるのか、それを出来るだけ緻密にプログラムしようというのである。そのプログラムは、オートメーションのプログラミング程にも緻密に考えようというのである。授業のプログラム方式とは、ただそれだけのことである。

しかし、これは、人づくりについてある重要な観点を提出しているものではないだろうか。